

日中は禍を奇貨とせよ

新型コロナウイルスの流行は日中関係にも大きな影響を及ぼしている。4月上旬に予定されていた習近平国家主席の来日は延期され、いつにするのかはまだ決められていない。

中国では武漢の封鎖など強力な措置が功を奏し、生産活動も次第に回復してきた。3月上旬から延期になっていた全国人民代表大会は5月22日より開催される。そこで習近平氏としては、感染症を克服したことを誇示し、5月7日の会議で述べたように、共産党のリーダーシップと社会主義体制が「強大な生命力と顕著な優越性を有して」いると国の内外にアピールしたいところだろう。

だが現実はどうかと言えば、回復の兆しがあるとはいえ経済の状況は厳しい。ウイルス蔓延の前から成長の減速が問題になっていたが、政府発表によれば本年1～3月期のGDP（国内総生産）成長率はマイナス6.8%に沈んだ。同期の固定資産投資の伸び率はマイナス16.1%、小売総額のそれはマイナス19.0%である。すでに家賃の帳消しや未払い賃金の支払いなどを求める争議が中国のあちこちで起きている。他国の状況よりまだましだとはいえ、これまで高速発展を続けてきた中国において、経済社会の不安定化は政治体制に影響を及ぼしかねない。

ウイルス対策への初動が遅れ、政権の求心力は揺らいだ。その立て直しのため、まず当局は防疫に集中し、今はその成果の宣伝と生産再開に力を入れている。他方、もう一つ尽力しているのが国際的なイメージの回復だ。ウイルスの発生源や初期対応をめぐる中国批判を繰り返す欧米やオーストラリアなどに対して激しく反論する一方、マスクや防護服など医療用品の提供、そして医師や看護師の派遣を行ってきた。だがやり過ぎの面もある。イタリアやドイツなどで、公に感謝や称賛を表明するよう中国外交官が求めたことは逆効果をもたらした。

では、日本との関係はどういう状況にあるのか。当初、マスクなどが不足していたのは中国の側であり、日本からの支援は広くメディアで伝えられ高く評価された。奈良時代に鑑真和上を招く際、長屋王が送った「山川異域 風月同天」（離れていても同じ空の下にいる）という言葉が支援物資の箱に書かれていたことに多くの中国人が感動した。やがて日本でマスクが足らなくなると、今度は逆に中国からの支援物資がたくさん届くようになった。

しかし、コロナウイルスの影響が長引いてくると、相手に対する不満や疑念も聞こえてくる。中国側が気にしているのが、日本政府が打ち出したサプライチェーン改革だ。これは、日本や東南アジア諸国への生産拠点の移転を補助する政策だが、予算の9割以上は日本国内での生産拠点整備などに当てられている。リスクを下げ、かつ日本経済を立て直すことが主目的であるわけだが、工場の移転を恐れる中国では反中的政策だと受け取る向きもある。

他方、日本側から見た懸念材料は、中国海警局の監視船が頻繁に尖閣諸島の海域に入っ

てくることだ。5月8日から10日にかけては連日領海に侵入し、操業していた日本の漁船に接近した。中国側に言わせれば、ここ数年、民間の漁船は領海に入っていなかった、「現状変更」は見過ごせなかった、ということのようだ。だが、抗議は外交ルートを通して口頭で行えばよい。行動に出ることは危険で質的に次元の異なる乱暴なやり方であり、日本側としては到底納得できない。

米中の非難合戦は、どちらのしくじりがより大きかったかを競うようなもので見苦しい。そこに働くのは、国内の不満をかわし、外にぶつけようとするそれぞれの政権の思惑だ。どの国でもコロナウイルスは経済社会を痛めつけている。日中の間でも、気を付けないと鬱積した不満の矛先が相手に向かないとも限らない。

それを回避するには緊密な意思疎通が欠かせない。感染症のせいでそれがままならない今こそ、マスメディアは大きな役割を果たせる。日本人も中国人も先入観が強く、相手の実態をあまりにも知らない。政治体制、経済社会の現状、人々の悩みや喜び。相手が何を考えているのか、この禍を奇貨としてジャーナリズムに迫ってほしい。